

この教会をこよなく愛し、遠くより近くより、西から東からお集りいただいた来賓の皆様と、わが神戸教会の兄弟姉妹を前にして、牧師就任の辞を述べる機会を与えられましたことを深く感謝いたします。

省みますれば神戸教会牧師銓衡委員会より、招聘の意向のあることをお聞きしてから、ほぼ一年の歳月が流れました。長い時の経過を憶えつつ、今このところに立っていきます。この期間ほど「牧師の務め」というものについて熟慮を促されたことは、かつてありませんでした。

古えの預言者のこと、イエスに従つた弟子たちのこと、世々の教会に仕えた働き人たちのこと、そして身近な先輩方、同僚たちの「召命」に思いをはせ、自からを省み、その不明を歎くことしきりであります。しかし、この務めは、神が指引シャティーブをとつて召された務めであります。

この確かに立ち帰り、時に従つて風が吹くよう時に、聖霊の導きにゆだねつつ負う以外には負いよ

うのないものであること、を過ぎし方に加えられましたことを深く感謝いたしました。

いすれの教会にあっても「教会」というところには、信仰の先達がきら星の如く輝いています。

信仰の戦いの厳しさにおいても、深き渾より神を呼び求める祈りの切実さにおいても、この世の憂いがあるがままに受けつゝなお心が清くされていることにおいても、人の世のしながらみをキリストのあがないを信じつつ負うことにおいても、国家権力との対峙においてゆるぎなき証しの戦いを構築することにおいても、また教会形成の辛酸をなめることにおいても、また「牧師」との人間関係の難處に耐えつゝなお神の養いを信じる事においても、実際に信仰の年輪を刻むこと多き兄弟姉妹が隠れた輝きをもつて存在しています。この事を思

では決してないことを、自らを省みさやかにさせられる時がありました。

しかし、抜き差しならぬ出来事の積み重ねを、それなりにたどたどしく歩んできた一人の人間が、これまでの経験の総体を、今一度解体されつつ、あえて牧師という

福音主義や教条主義や宗教的違観に吸い寄せられていく事に注意深

のが、熱狂主義や教条主義や宗教的違観に吸い寄せられていく事に注意深

せられたならば、牧師も、実体

言葉にあやかってこの言葉にあやかっていし、する事を選ぶ」。

岩井牧師御一家



岩井牧師御一家

く目を向け、そういったものはとはつきり区別をして、個という自分であります。続ける事に、人のありよとしても、実に信仰の年輪を刻むこと多き兄弟姉妹が隠れた輝きをもつて存在しています。この事を思

うの夢を賭けて捉えていたるある哲学者がいます。彼はそのようなたずまいを、その先はもう見えないところに立っているところへ導かれるには、教会の塔から神戸の街並を眺めますとき、この会堂が先人たちによって

來賓の皆様に、どうか切

なる祈りをもつて連帯を

して戴きたくお願いをして、式辞に代えさせてい

ただきます。

かからぬが、御靈みずから、言葉にあらわせない実体としているかどうかは疑がわしい。自分の存

在というものは、まわりの空気は薄くないにして

ても、かなり薄いものだ。

してでなくとも、役割と

して、自分個人の責任に

おいてかけをした方がいいし、する事を選ぶ」。

神戸教会は幾多の風雪

を経て歴史を刻み、今104

周年を迎えてます。す

べての御靈をもつてか

かわり、想像力を持つ

か、はるか思い見ざるを

さえぎられて見えないよ

うに、現代の教会もこの

現実です。しかし「仕え

らるためにではなく、

仕えるために」(マコ10

・45)と世の罪と重荷を

負って先立ち給うのが主

イエスであります。この

ことを信じ、兄弟姉妹と

荷を分かつことによって

共に育てられ「みまねき

かしこし我はゆかん、お

のれをすてつ十字架を負

いつ、あまつたげにあ

ずかるまで」と心に讃美

をかなでつつ、励んでま

いりたいと思います。

近隣及び関係諸教会、

來賓の皆様に、どうか切

なる祈りをもつて連帯を

して戴きたくお願いをして、式辞に代えさせてい

ただきます。

はるかな道程があるこ

とを憶えます。「わたし

はどう祈つたらよいかわ

薩の濃さは、高度経済成

遂行を鈍らせこそすれ、

そしてその間、銓衡委員

會の次第であります。

うに言っています。「自

からぬが、御靈みずか

ら、言葉にあらわせない

実体としているかどうか

は疑がわしい。自分の存

在といふと、そ

れは考えられなかつた高層

ビルが林立し、視界は狭

まり、その死角は広がつ

ています。その底に沈む

(一九七八年五月二八日 牧師就任式にて)